



スターオーシャン  
スプリジンス

テキスト付差分集































「きゃっ……♡ ううっ……♡」

無機質の金属製で囲まれたフロアにて、愛くるしい少女の萌え声の嬌声がこだまする。そこには子供っぽいファッションセンスの少女が。台の上にて拘束されていた腕は上げた状態で球体の天井の壁に埋め込まれている。天井はオーバートクノロジーの発光物が灯が照らされ、その煌々とした光の矛先は箱のような白い柔肌の股間部へと鮮明に向いている。玉のようない薄ピンクの小さな花びらの小陰脣は、形状記憶素材のクリップにてくばあど少女らしい薄ピンクの小さな花びらの小陰脣は、形状記憶素材のクリップにてくばあど拡張固定されており、ぶちぶちざらざらな数の子天井が見えるほど腫口が拡張されぶにぶにふわっとした芽吹きそうなつぼみのアナルもほっかり拡張されている。

「ちょっ……動けない！ 無人くんどうしちゃったのっ？ やりすぎだってばあ！ ゆ〜こと聞いてよ〜！ 応答お〜と〜！」



少女の名はフリシス。惑星エクスペルのリングに住む発明家の少女である。

エクスペルは機械技術が未発達でありながら、発明家のフリシスは

オーバートクノロジーと言わんばかりの機械を自作している。

その機械のデザインは見るからに子供のおもちゃのような独特なセンスであることから

特異な目で見られ、周囲から村八分にされている。

天真爛漫で幼い顔であり、料理も得意としており、「小学生シェフ」と言われるが

これでもれっきとした法的に結婚できる年頃の乙女である。

フリシスを拘束している機械は、自作の「無人くん」であり

普段はリュックサックのようにしょっている。

実装されたマジックハンドを駆使して武器にも使える代物であり

ことものおもちゃのようなコントロールで操作するものだが

どうやら何かのトラブルで自律回路暴走してしまい、このありさまのようである……。

「つわぁ……と、と〜しゅぁ……」

胸かくぎゅっとなりそうな愛くるしい幼な声を漏らすフリシス。おっちりとした内もみは無人くんのフレームでかき股に開脚拘束されているフリシスのお尻には、恥ずかしさで感じた愛液がみすみす滴り落ちており、金属製の台には、ぶにゅっとしたお尻を伝い、小さな水溜まりがじんわり出来ている……。



「ん……う？ ええっ!? ちょっとぢゅっぢゅー なじない……!?」

動揺するフリシスの恥丘の頂上にある女の子が最も感じる器官であるクリトリスへ無人くんの魔の手が忍び寄る……

その手は通常のマジックハンドではなく、何かを吸引するポンプのようであった。吸引ポンプはおもむろにフリシスのぶっくりと丸みを帯びたクリトリスに迫り、きゅぽっと吸引器を覆いかぶせてきた。

「♡♡♡♡♡」



くぎゅっとした愛くるしい萌え声で反応を示すフリシス。吸引器はクリトリスを包むと、きゅぽきゅぽとフリシスのクリトリスを吸引し始める。

「ふあっ♡♡」

「あっ♡」

小粒なりとも快楽神経が詰まったクリトリスを小刻みに吸われたフリシスは

小動物の鳴き声のような声がつい出てしまう。最も感じるクリトリスの快楽は、内ももの筋もピクピクさせ、愛液はぽっかり空いたアナルを滴り、前から見えるお尻にはさらに小さな枝分かれの愛液の川が出来る。

「私のクリ……ちゅっちゅっ吸ってる……♡♡  
ううっっっ 気持ち良くなっちゅうよっ♡♡」



クリトリスを吸われる快楽に、前庭球やアナルどころか全身をピクピクさせるフリシス。無人くんの手により自身の一番気持ちいいクリトリスがみるみるホッキク固くなる姿を心配そうな目をつるつるさせ、眺めるしかなかった……



吸引の快楽に見悶えているクリちゃんほと化したフリシスのクリトリスの元に  
無人くんのマジックハンドが、いかにも機械的なカクカクギーヨンガシヤンとした  
ぎこちない動きで迫りくる……。

「さあっ……♡」



なになに……!?」

「何するの……♡」

マジックハンドの人差し指が、クリトリス吸引器に付けられていた黒い輪ゴムに  
引っ掛ける。

「ズズッ……んんん……んんん……さっ……さっ……さっ……んんん……♡」



フリシスはマジックハンドの輪ゴムがゆっくりに下げられるのを見て  
この後どんな目に遭うか想像し、不安と迫りくるであろう快楽との期待が  
入り混じった気持ちになり、無意識に大陰脣の前庭球をヒクヒクさせる……。

マジックハンドの人差し指がゆっくりにクリトリス吸引器に付けられている  
黒輪ゴムをするくと下ろしていく……

「やあっ♡」

ねえねえ……



うそっ♡

うそでじゃ……っ

黒輪ゴムは吸引器から離れ、クリトリスの根元まで下げられそうになっていた……

「うそでじゃ……っ、 無人くん……っ、 もうやめよう、 キンギン……ヘルフィーだよ」



クリトリスの中でも根元は特に感じる部位である。そんな箇所を黒輪ゴムが下が  
締め付けられたら、常時吸引され続けられているような圧迫の快楽を余儀なくされる。  
それだけではない、既に吸引器でびよんと引き延ばされている今の状態の  
勃起クリトリスの根元を輪ゴムで締め付けられたら、クリトリスに充血した血流が  
逃げ場を失い、勃起したまま圧迫固定されてしまう。ただでさえ感じるクリトリスが  
そんな目に遭ったら、どっぴゃっというくらい絶叫ものである。

と、発明家ならではの想像力豊かなフリススは、脳内でどことどこを支離滅裂ながらも  
論理的に自身のクリトリスに起こるであろう状況を分析していた……

「きゅぽんっ♡」

「♡ぽんっ♡」



びゅんっ♡

マジックハンドの指が、黒輪ゴムをクリトリスの根元まで引きずり下ろす……！  
クリトリス事情の分析に気を取られていたフリシスは完全に不意を突かれ、  
間違えてちょびっと潮を吹いて軽くイってしまった♡



吸引されたクリトリスは輪ゴムで締め付けられ膨張したまま固定されており  
脳が認識するよりも不意の快楽に反応した会陰とアナル周りの前庭球は  
いぶっくら膨張と収縮を繰り返してピクピクと痙攣している。

「うひゃあ〜……びっくりしてちゃっぴりイっちゃった……♡  
それにしてもこんなに腫れちゃった私のクリ……ど〜しよ……」



拘束されてなすすべもなく、クリイキの絶頂の余韻でヒクつくフリシスは  
そのギンギンに晴れ上がった自身の巨クリをただただひたすら見つめ動揺している……。

“ か ぽっ ♡ ”

「うっ♡」



くびっ♡

クリイキの余韻に浸っていたフリシスの巨クリに、マニピュレーターにより不意打ちを受ける……！  
何かつるんと滑って生暖かくもっちりふにゃ〜んと柔らかかなものにクリトリスを包まれたような甘味な快樂であった。

気を緩ませていたフリシスは、急な不意打ちによる快感で間違えてイってしまった！  
尿道口がぶっくくりせり上がり、くびっ♡と弦を描いて少量の潮を吹いている。

急な刺激より、フリシスは目をぱちり見開き、口はOの字になり拘束された全身をソクソクビクビク痙攣させている……。

マニキュビュレーターがフリシスのクリトリスから離れると、ソコには男子が愛用するようなオナホールが、フリシスの巨クリを包み込んでいた。

先ほどの生暖かいぬめぬめした柔らかいものはこのオナホール……クリオナホであった。

通常なら米粒のように小さい女子のクリトリスにオナホを嵌めることは困難だが、今のフリシスの巨クリは子供の赤ちゃんよりも太くなっているので装着させるのも容易であった……

「ほえほえ……。うわ、真っ赤……♡」



拘束された身体では、自身のクリを客観的に見つめるしかなないフリシスは、このクリオナホを見て次にされることは何なのか容易に予想出来、この先起こるであろうきたるべき快樂に見聞えている……



「……………」

再びマニキュェレーターが  
フリシスのクリトリスの元へ迫り  
クリオナホをがっしりわしづかみする。

クリトリスに包まれたオナホールを  
掴んですることは一つしかない。



「う……………ウソでしょ……………無人くん？  
もうやめない？ もうやめよう？ てったい てったい……………ふひひ♡」



万事休すなフリシスは、無人くんに撤退の指示を懇願するも  
無慈悲にもその魔の手は無造作にも稼働する……………！





「イクっ♡ イクっ♡ イクの止めてっ♡  
 もう終わり♡ 帰る♡ 私かえるう♡」

お尻の先にある台の穴へとおびただしい量の液体がびとびと滴り落ちていく……  
 潮と共に濁流の滝となつて溢れたアナルを埋め、もっちりした前から見えるお尻を  
 溢れ出し、ほっぺたり拡張された本気汁がまるで種付けプレスされた精液のようにとくとくと  
 降口からは白濁とした本気汁がまるで見えないほど一定のリズムを保ち  
 完全に音をあげているフリシスにお構いなしに、マニキュアしたクリオナホを  
 扱く手は収まるところか終わりが見えないほど一定のリズムを保ち  
 フリシスの絶頂の脳液を感じするかのよう、照明が千力千力と強く点滅を繰り返す！



「ウソっ♡ なんて？ 私イってる♡  
 イってるのになっ♡ 無人くん♡ お願い♡  
 もうやめて 終われ♡ かん♡ ヘルフ♡  
 ヘルフ♡ 私壊れた♡ おまんこ壊れた♡  
 おまんこずうくと♡

スーパービームだよ♡♡♡  
 おおおおお♡♡♡

# 20時間後……

「……ホッパフ」

「……ステッパフ」

「……モール」

「……母かおろろタタタ」

「……ロケットばーんち」

「……パリーヤ」

「……スラホホホーん」

「……ドク」

ようやく無人くんの猛攻な快樂責めから解放されたフリシスは未だ拘束されている全身をヒクつかせながら、レイフ目の状態で余韻の中を意識が彷徨い放心状態となっている。

散々扱かれた後である巨クリは未だヒクヒクさせ、真っ赤に腫れあがっている。尿道口も前庭球も力みっぱなしで、残潮と残り汁をびゅくびゅく出し続けている……。



「マナクリーナーってしべルじゃないねコレ……♡  
キレイキレイし過ぎだよ 無人くん……♡」

どうやらこれも発明家であるフリシスによる試作運用テストだったのか、無人くんの暴走による事故だったのか、どちらにせよフリシスの股間部の惨状から想定以上の結果だったようである……。

フリシスの絶頂の脳液を感じに合わせ千力千力とまぶしい照明があられもない巨クリや拡張された腺口、アナルを煌々と照らし、快樂の液体を噴出させる孔までくっきりはっきり鮮明に映し続けている……。

「はー 気持ち良かった……♡」

